

捨てるもの、捨てられないもの —国際ワークショップから

文
関本照夫

機関研究 ● 「マテリアリティの人間学」領域
布と人間の人類学的研究(2010-2012)

機関研究プロジェクト以前

「布と人間の人類学的研究」と名付けた研究プロジェクトは、2011年の1月に始まり、1年半が経った。その代表者である私はこれまでジャワのバティック（更紗）産地で工房を訪れ、経営者、労働者の仕事の様子を調査してきた。19世紀初期以来のバティック産業史については、既存の古いオランダ語文献以外にも、インドネシア・バティック協同組合連合の本部や地方支部で貴重な文献や資料を得ることができた。インドネシア工業省が主催するバティック見本市では多くの知己を得た。また、首都ジャカルタの高級ファッションを志向したバティック・デザイナー、大小の小売業者、さらに日本や欧米からやってきた現地生産者、世界を飛び歩く流通業者、日本国内の小売業者、美術館関係者、バティック作家、愛好家と消費者など、いろいろな人たちと会い、多くのことを学んだ。日本の人類学者で、私と同じように布をめぐる研究をしている方々も、いまや少なくない。若い研究者の間でもこの分野への関心が高まっている。そこで30年ぶりに民博に勤めることになった私はこのプロジェクトを始めた。

18-19世紀の西欧で機械紡績・紡織が始まり、さらに19世紀末に化学染料が開発されて、布の製造技術は大きく多様化した。だが布を織ること染めることは、人類の古い時代に始まり世界中で行われてきた。長距離交易、市場と商業、さらに、交換と贈与、身分と権威、礼儀とおしゃれなど人と人の関係をさまざまに織り成してきた布は、人類学にも歴史学にも多くの話題を提供する。世界各地域での近代社会の成長を考える際も、繊維産業の果たした役割は重要である。布を織り染める技はまた、身体技法、人とモノの相互関係の研究に多くの手がかりを与える。布や衣を身にまとうことによって人が変貌する、布というモノが人を動かすなどなど、布の研究を一旦始めると興味はどこまでも広がっていく。民博という共同利用の場で、これまでそれぞれのフィールドで多様な研究を行ってきた全国や海外の人々とネットワークを作り、その成果を総合していく機会は貴重なものである。

中古品を考える

今年初めには国際ワークショップを開き、私自身にとっても今までとは違う新しい問題が見えてきた。その成果は現在英文による出版を目指して準備中だが、以下で簡単に紹介し



バティック見本市で（1999年、インドネシア、関本照夫撮影）。

たい。

国際ワークショップ『捨てるもの、捨てられないもの—布の履歴からモノの消費を考える』は、2012年2月7日～8日の2日間、民博第4セミナー室で行われた。「中古衣料流通の歴史」「中古商品とコピー商品の流通」「伝統と市場の狭間で」と、3つのセッションが順次行われ、9人の報告者による8つの発表が行われた。また2人のコメントーターが発言し、ついで総合討論も行われた。

会議の最大の特徴は、文化人類学者と社会経済史学者の協同によって実現したことにある。日本や西欧の都市史・商業史への関心、現在の世界を席卷している中古衣料・中古商品流通への関心、そして現代伝統染織の世界で特別の価値が与えられる古い布（つまり中古である）への関心が集まって、「捨てるもの、捨てられないもの」というテーマができた。貧しい社会、貧しい人々が、購買力の低さ故にやむ

なく中古品を求めるといった見方がある。いずれ経済が発展すればこうした需要は大きく減るであろうというのである。

このような前提に対して、次の3つの関心が喚起される。1) 日本でも西欧でも19世紀以来大量生産の新品が安く出回るにつれ、中古品市場の役割は削減されてきた。だからこうした見方は間違いではないが、それだけで現代世界における膨大な中古品流通がすべて説明できるのだろうか。2) 古くなれば値が安くなるというのは普遍的真理だろうか。古くなる（時が経つ）につれて値の上がるものもある骨董品市場は例外として度外視して良いのか。3) 個々のモノ・商品の側に視点を定めてその履歴を通観していくと、人とモノの関わりに何が見えてくるのか。こうした疑問を共有することで、ふたつの専門研究分野が合流し、上に挙げた3つの関心がひとつに集まった。これがこの会議の前史である。

会議はこう進んだ

セッションと発表は以下の通りである。会議は同時通訳を用いて主に英語で行われたが、ここでは日本語で示す。

第1日目 2月7日（火）

趣旨説明 関本照夫・小川さやか（国立民族学博物館）

【第1セッション：中古衣料流通の歴史】

「仕立直し品、古着、ぼろ—江戸時代における中古衣料流通の三層システム」

小林信也 (東京国際大学)・杉浦末樹 (東京国際大学)
「使い捨て社会への途?—ある近代化する都市での中古
品の流通・アントワープ 18-19 世紀」
イリヤ・ファン・ダーメ (アントワープ大学)

【第 2 セッション：中古商品とコピー商品の流通】

「インドにおける衣料リサイクル産業：価値の破壊？」
ルーシー・ノリス (ユニバシティ・カレッジ、ロンドン)
「アフリカの消費者、帝国、モノのグローバルな履歴」
ジェレミー・プレストホルド (カリフォルニア大学
サンディエゴ校)
「東アフリカにおける中古衣料とコピー品の越境交易」
小川さやか
討論：コメント 小川さやか

第 2 日目 2 月 8 日 (水)

【第 3 セッション：伝統と市場の狭間で】

「アフリカのカンガ布にすり込まれるインドのイメージ」
金谷美和 (京都大学)
「インドネシアのバティック、モダンファッションか、骨
董品か、安価な商品か」
関本照夫
「変身過程のトルコ絨毯—産地での消費と偶然的商品化
の諸相」
田村うらら (総合地球環境学研究所)
討論：コメント 中谷文美 (岡山大学)
総合討論：司会 小川さやか

第 1 セッションでは、社会経済史・都
市史の立場から、18-19 世紀都市の中古
衣料市場が論じられた。それは複数の市
場が機能分担しながら結びついた大規模
な市場であり、人々の暮らしに大きな役
割を果たしていた。卸商、仲買人、小売
商がシステムを作り、あらゆる古布が用
途に応じて異なる商品に生まれ変わって
いった。江戸、アントワープというふた
つの都市の事例が詳しくまた系統的に提
示されることにより、中古の衣料が、単
に周辺の安物としてだけではなく、多
様な商品に変わっていく様子を、われわ
れは再認識した。

第 2 のセッションは視線を 20 世紀～
現在に向け、東アフリカでの布の輸入、
インドにおける中古衣料の輸入と再生毛
布としての輸出に焦点を当てて、繊維・
衣料をめぐるグローバルな市場のダイナ
ミクスが論じられた。かつてイギリスに
あった再生毛布製造の中心は、いまやインドに移っている。
その工場の中古衣料を裁断し機械にかけて働く女性たちの労働と語り
が映し出された最新の映像作品も、発表とともに上映され、中古衣料が
手仕事と機械で毛布にリサイクルされるさまは、参加者に圧倒的な印象
を与えた。また東アフリカにおいても、植民地宗主国による消費市場支
配の意図が、現地



ムランゴ・ムモジャ古着市場 (2004 年、タンザニア、小川さやか撮影)。

消費者の好みや流行、インドや日本の繊維産業の輸出努力と葛藤する中で困難にぶつかる状況、中古商品と(新品である)コピー商品とが消費者の選好を争うさまなど、新たな発見が提示された。

2 日目に行われた第 3 セッションは、インド、トルコ、インドネシアなどで地域の独自の伝統産品と考えられている染物や絨毯が、繊維産業や消費文化の世界的絡み合いの中で、どのように形を作り上げ、また世界市場との相互関係を作っているかに注目した議論だった。インド・カッチ地方の絞り染めパターンが、東アフリカのカンガ布デザインと関わってきた文化史が語られ、またトルコ絨毯やインドネシアのバティックの 1 枚、1 枚が時の経過とともに、どうあり方を変えるかが、各発表者により描き出された。商品になったり、贈答品や家庭財として市場から退場したり、質草になったり、趣味の中古品として売られたり、古い美術工芸品として高価になったりという、布の履歴上の転変が浮き彫りになったのである。

このワークショップには、関東・関西の大学院生、若手研究者を中心に多くの聴衆が参加し、討論にも加わってくれた。また、このワークショップ開催のきっかけを最初に作ってくれたのは、東京国際大学で経済史を教える杉浦末樹さんと民博の小川さやかさんである。そこから異分野が合流する国際会議が実現し、母体となった機関研究プロジェクトの研究が、幅と深みを増すことになった。



伝統バティックを売る (1999 年、インドネシア、関本照夫撮影)。

せきもとてるお

先端人類科学研究部特任教授。専門は仕事の人類学。編著書に『国民文化が生れる時：アジア・太平洋の現代とその伝統』(リポート 1994 年)、論文に「ものを作る技の伝統」(松井健編『自然の資源化』弘文堂 2007 年) など。